

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年12月1日発行
(毎月1回1日発行)
第14巻第12号 通巻162号

12_{月号}
2019



字治十帖二夕夜続きの天の川

藪蔭に置かれてゐたる囚籠

漁りの舟出払うて神の留守

抛られて受けて藁塚積まれゆく

近江はも啄木鳥の樹を叩く音

一舟の過ぎたるあとの水の秋

月今宵水を豊かに紙の里

雁来月なり蟹町の子らのこゑ

つぎつぎときちきちばつた僧正忌

脳内出血ありとや雁の渡るころ

秋うららナースの声の明るくて

まだ病癒えずに後の更衣

路地抜けて抜けて鴻司の忌でありぬ

近江はも

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

太郎次郎家を離る柿の里

中西富士子

流されて停まりて風の秋あかね

岩崎 俊

水色のポケットチーフ秋気澄む

石垣真理子

白湯汲めばほのかに甘し夜の秋

山内宏子

大花野 呟くやうに風の立つ

藤原明美

火を焚いて岩戸開きの里神楽

西條弘子

谷崎の生誕の地に小鳥来る

田邑利宏

五山送り火大の字の赫きこと

小林和子

いには野の沼は回廊鳥渡る

横尾かな

曼珠沙華咲くあたりにて折返す

荒井一代

秋日傘の中にわたしの小宇宙

林 未生

捨てられぬ菓子の空箱小鳥来る

三代川朋子

浴衣着て神社の裏の恋ばなし

中川幸恵

雨しとど罅を深めし種茄子

田部富仁子

移りゆく街のジオラマ半夏生

鈴木 崇

木歩の忌かごめかごめで日の暮るる

岡 杜詩

色鳥の声を佛のこゑと聴く

倉林はるこ

晩稲刈りごろ鳶笛のよく透る

北村 操

ドローンを柵田へ飛ばす野分後

伊藤真代

吾亦紅おもてなしとはさりげなく

野村昌代



『レギンザ・レギン』—日本シヨウビシネス楽屋口—

和田誠 著 文春文庫・刊

この十月に、イラストレーターの和田誠さんが亡くなった。シンプルで味わい深い和田さんのイラストは、週刊文春の表紙を長らく飾っていたので、ご存知の方も多いと思う。週刊文春の編集長は、追悼のコメントとして「これまで和田さんが描いてきたイラストがたくさんあるので、今後も使っていく」と述べていた。

和田さんは文字通り多才で、イラストの他にも煙草のハイライトのパッケージ・デザインをしたり、映画にも造詣が深く、小泉今日子主演の映画『快盗ルビイ』を監督してブルーリボン賞を受賞している。

そして全盛時代の日劇のレビューを演出した山本紫朗は和田さんの伯父にあたり、山本氏に取材して書いたノンフィクションが『レギンザ・レギン』である。若き日のダニー・ケイや、初期の日劇ダンシングチームのスター、根岸明美、舞台監督だった森繁久弥などがキラ星のごとく登場する。和田さんはこの本で、角川書店日本ノンフィ

クション賞を受賞したのだった。

本書は、日劇が取り壊されるところから始まる。同時期に取り壊された朝日新聞社の社屋は引越しを済ませていたが、日劇は移転をせず、消滅してしまうのだった。和田（以下、敬称略）は大学生時代から日劇にレビューを見に行っていたから、ファンからの視点も含めてスターたちを次々に取材していく。それらを大きな視点で締めるのが、本書での山本の役割だ。レビューの踊り子から映画スターが生まれたり、音楽担当の服部良一が作曲した「東京ブギ」などの曲を笠置シズ子に歌って大ヒットしたり、日劇の物語とはいえ、さながら戦後の芸能史の様相を呈する。



和田が山本の甥っ子だったからか、スターたちはぎつくばらんに裏話を開陳する。たとえば根岸は踊りを辞めた理由を、踊っていてある振り付けになると必ず膝の関節が外れてしまうようになったからだと言白する。「今度の日劇の最後の舞台も、出てみたいなあ、と思いましたが。でも、脚がはずれちゃったらなあと思っし」。赤裸々な言葉が、胸に刺さる。

かと思うと、「横浜に六つくらいの子でうまいのがいるよって言うんで、

横浜へ行ってきたんです。（日劇に出したら）笠置さんも灰田（勝彦）さんも、みんな食われちゃって。お前、変なもん連れてくるなよ、って言われちゃった」と山本は語る。この歌の上手い子が、美空ひばりだった。

とにかくエピソードが面白い。その間に挟まれる和田の感想がまた面白い。レビューの表舞台だけを見て楽しむのもいいが、それだけでは見えない裏方の才能と工夫を探り当てる和田の筆運びが見事だ。

そして本書のタイトルになった「レギンザ・レギン」は、コール・ポーターの作った名曲で、この歌にまつわる章の主役として越路吹雪が登場する。終戦から三年が経ったころ、山本はあるパーティで越路を紹介された。越路は初対面の山本に「踊りませんか」と声を掛け、そのとき流れていたレコードの「レギンザ・レギン」に合わせて二人は踊ったのだった。

しばらくしてコール・ポーターの伝

記映画『夜も昼も』が日本で封切られることになり、その試写会に山本は越路を誘う。「もちらん行くわ」と答えた越路は、映画を観終わってから、ひと言も発しなかった。「どうしたんだ？」と山本が尋ねると、越路は「いましゃべると、感激がこわれちゃうのよ」と言い放つ。

この台詞の生々しさは、どうだ。和田の聞き書きの技術の高さがあってこそものだが、越路の気風のいい返答が快い。越路は余韻を楽しみたかったのだった。

「目つむれば蔵王権現後の月

阿波野青歌」

俳句は余韻が大事と言われるが、青歌はこの句で余韻そのものを詠んでいる。目を閉じて心の中で再生すると、鑑賞は深まる。越路はその後、何度も「レギンザ・レギン」を歌って絶賛されることになるのだが、その歌唱に先の映画の余韻が影響したことは想像に難くない。その他、本書には「日本

シヨウビシネス楽屋口」と副題が付いているように、楽屋からしか見えない景色がたくさん収録されている。

「橋なくて日ぐれんとする春の水 蕪村」橋を日劇に置き換えてみてもいいだろう。蕪村は物事の「不在」を詠って名句をたくさん遺しているが、和田は「日劇の不在」を丁寧に描く。気取った芸術ではなく、あくまで大衆を楽しませる芸能は、劇場の不入りという現実を前にして取り壊されていった。

レビューの華やかさと儂さの間に、和田は何を見たのか。豊富なエピソードが語るのは、泥臭くも無垢な日本のシヨウビシネスの原風景だ。それはある意味、和田が見たかった、虚と実の織りなす美しい人間の波紋だったのではないかと思う。

「踊りたがる、外れた関節」はそのまま詩になっている。この素晴らしい芸能論を書いた和田さんの冥福を、心から祈りたい。

「頼杖の何を見てゐる冬銀河 楸野」

俳句に詠まれた栗

榎尾麻衣

栗が古代より重要な食料として栽培されていたことは、数多くの遺跡が証明しています。

栗のちからかぎりに夜もにほふ

飯田龍太

栗の花まつたりと昼深みたる

吉田鴻司

栗の散つて平仮名ばかりなる

半谷洋子

初夏の頃花穂をつけ青臭い強い匂いを漂わせる。

赤峰ひろし

行く秋や手をひろげたる栗のいが

芭蕉

栗ひろひねんねんころり云ひながら

一茶

毬栗や冠者顔して木曾に入る

吉田鴻司

やがて実をつけ、棘のある毬に包まれ成熟するにつれ

石田波郷

褐色の実となる。強い風が吹いた後には沢山の実が落ち

水原秋櫻子

拾い集めたものです。

栗むくや若く哀しき背を曲げて

西東三鬼

雨くらきわびしさに栗茹でてをり

吉田鴻司

別れ来て栗焼く顔をほてらす

正岡子規

焼栗の爆ぜて一茶忌近うせり

日野草城

栗飯のまつたき栗にめぐりあふ

石川桂郎

栗飯を子が食ひ散す散させよ

着流しの桂郎のこ糸栗強飯

吉田鴻司

古代より成熟した栗は、生でよし、焼栗・茹栗・栗飯・栗強飯と現代では和菓子・洋菓子と幅広く愛されています。特に栗飯は鬼皮や渋皮の処理に手がかかるけれど、母の愛情がたつぷりのご馳走でした。

栗を出て行き所なき栗の虫

江中真弓

栗一つ栗虫一つ穴一つ

細木芒角星

栗を剥いている時に幼虫が出てくるとがっかりしてしまいます。

後藤兼志

子供の頃は粒の小さな柴栗を茹で、甘味が強いのでおやつとして喜んで食べていました。

最近は大きな丹波栗が主流となり、保存方法も確立し、料理・菓子と年中食べられるようになりました。原稿依頼が届いた時は予定が集中していたので迷っていました。翌日の墓まいりのおり寺領の一角に大楠・大銀杏・松・紅葉・萩に交じり、栗の若木が青々とした実を付けていたのです。このタイミングでの出会いに驚きと共に感慨深いものがあり、即「諾」の返信をしました。

不思議な力が働いたような感覚でした。

草の絮スローライフを楽しめり

船橋 藤原明美

大花野呟くやうに風の立つ

萩芒 不断の暮しこなせれば

萩月夜昔語りの滑らかに

秋うららふはと育てし娘が二人

二人乗りのレンタサイクル秋日和

さいたま 佐藤慧美子

水中花夜とは言へど爪を切る

置屋の中で首振る扇風機

水中花言訳ばかりの人生ぞ

金槌の音が轟く菊日和

シャッター通りマロニエの実の落ちるとき

土浦 小林和子

五山送り火大の字の赫きこと

ピエロかく画家の個展よ秋の虹

黄落の始まつてゐる耀歌の地

さるすべり百日過ぎの疲れかな

残る蚊に深き眠りを破らるる

流山 中内敏夫

阿波をどり女のたをやかな足捌き

風音のなき日を選び冬支度

虫の音の熄みたるあとの夜の静寂

櫓田に数多の鳴の見え隠れ



羽音集

増成栗人選



草の絮スローライフを楽しめり 船橋 藤原明美
大花野呟くやうに風の立つ 萩芒 不断の暮しこなせれば
萩月夜昔語りの滑らかに 秋うららふはと育てし娘が二人
二人乗りのレンタサイクル秋日和 さいたま 佐藤慧美子
水中花夜とは言へど爪を切る 置屋の中で首振る扇風機
水中花言訳ばかりの人生ぞ 金槌の音が轟く菊日和
シャッター通りマロニエの実の落ちるとき 土浦 小林和子
五山送り火大の字の赫きこと ピエロかく画家の個展よ秋の虹
黄落の始まつてゐる耀歌の地 さるすべり百日過ぎの疲れかな
残る蚊に深き眠りを破らるる 流山 中内敏夫
阿波をどり女のたをやかな足捌き 風音のなき日を選び冬支度
虫の音の熄みたるあとの夜の静寂 櫓田に数多の鳴の見え隠れ

隆さんにはじめてお会いしたのは、確か何年前の「東京句会」の花見句会だったと記憶しています。

帰途のメトロでご一緒し、俳句の話はそつちのけで書について語り合ったことを覚えています。

書に関して言えば師系も書風も違うのですが、俳句にしても書にしても共通の楽しみを持つ人とは初対面であるにも拘わらず、以前からの知り合いだったような気安さで接しられるのは不思議なことです。

台風の目の中におて墨をする

迂闊にも一字脱けたる古書かな

馬の字は立ち姿なり寒の入

七日正月汚れたる手が紙汚す

ゆつくりとゆつくりと墨磨りて冬

博の字の点を忘るる暑さかな

秋の夜筆の穂先をもてあます

霜月夜義之の臨書をきりもなく

「迂闊にも一字脱けたる」の句、「馬の字は立ち姿なり」や「博の字の点を忘るる」「義之の臨書をきりもなく」などは、同じ経験をしていたにも拘わらず一句も成さずにきた者としてそ

首塚の何やらあやし鳥雲に

さりげない日常のひとこまを実に丁寧に切りとつている確かな目線と優しさが垣間見え、「落ちさうで落ちぬ」の句などは平明な表現ながら兼志さんの俳句を彷彿とさせる雰囲気があり、そこには作者の心中にある深い思いが読みとれて余韻余情のある句です。

「首塚の何やらあやし」本当にその通りでこれ以上の表現はないと納得、簡潔な言葉で句を成す為に常に研ぎ澄まされた心で景に対峙しているからでしょう。季語も見事に収まっていてとても好きな一句です。

髭剃りのムースむくむく夏に入る

立春の卵つるんとむきあがる

欄干に凭れ春愁とはいかぬ

半熟の卵のやうな熱帯夜

若々しい感性で特に「髭剃りのムースむくむく」は、女の私には分らない動作ですが朝のひとときの作者の並々ならぬ意気込みが感じられます。「立春の卵つるんと」「半熟の卵のやうな」の二句、新鮮な感覚で何気ない景の一瞬をさらに端的に捉え、無理のない表現は見事です。

伊藤隆句集「筆まかせ」を読む

まつすぐな一筋の道

● 石田 蓉子



の鋭く細やかな観察力と感性にいたく心を打たれました。

弘法は筆を選べり春の雷

良寛の丸の一筆春隣

「弘法は筆を選ばず」と言われていますが筆の良し悪しは作品の出来に大いに影響するものです。大師ならばどんな物を使っても能書なりえたでしょうが、本当は筆を選んでいたのでとは考えると諺を逆手にとつた着眼点が見事で俳諧味に溢れた句と思います。

「良寛の丸の一筆」は、書に携わる人ならばいつの日か良寛様のような素朴この上もなく、それでいて深い趣のある字を書いてみたいと思うのではないのでしょうか。

たかが丸を書いただけですがその中にある何んとも言えぬ深い味わい、作者の感動が季語にうまく表現されています。

同じ日に生まれた人と日向ぼこ

迷ひたる路地裏にある花火跡

落ちさうで落ちぬ枯葉を数へけり

でで虫の島をどれだけ進みたる

あかのまま近道一つ見つけたり

欄干に凭れ何やら思案顔の隆さんは絵になりませぬ。

風船の紐まつすぐに漂へり

つくしんぼ褒められてまた伸びるやも

「紐まつすぐに漂へり」この紐こそが隆さんの目指し歩んできた今日までの道なのでしょう。とても趣のある句です。

「褒められてまた伸びるやも」俳句然り、書も然りで褒められることから思わぬ力が湧くものです。それにしても簡潔な表現でこうした句が生まれるその力量としなやかな感性にただ脱帽です。

俳句は勿論、書にも邁進されている姿を拝見し、私にも書三昧だった日々があったことを懐かしく思い出します。

私の宝物の手島右卿先生の作品集を差し上げのお約束、そのうちに果たしますので楽しみにお待ちしております。

これからの俳句や書にどんな才能を見せてくださるのか楽しみにしていますので、ご健吟ご活躍をお祈りいたします。

句集ご上梓おめでとうございました。

茶庵閑話 18

虫丸



句作りに

「なる」と

「する」が

あると

言われ

ました

が

三冊子の

芭蕉の言葉

だけだね



やはり

三冊子の中の「心の作は
よし、詞の作は好むへか
らす」に呼応するもので
言葉を弄んで「する」句で
はなく、本質を追求する
ことで自ずから「なる」句
を自然に導き出すこと



どれほどの

工夫を

こらしたと

しても

その作意を

見せず

いかにも

自然な

姿にまで

作品を昇華

させたところに

世阿弥や利休、芭蕉は

芸術的価値を見出して

きたんだ



ほくが

いつも

素顔と

見える化粧の

女性に惹かれるのは

世阿弥や芭蕉に通じ

る感性からだっただけ

ですね!!